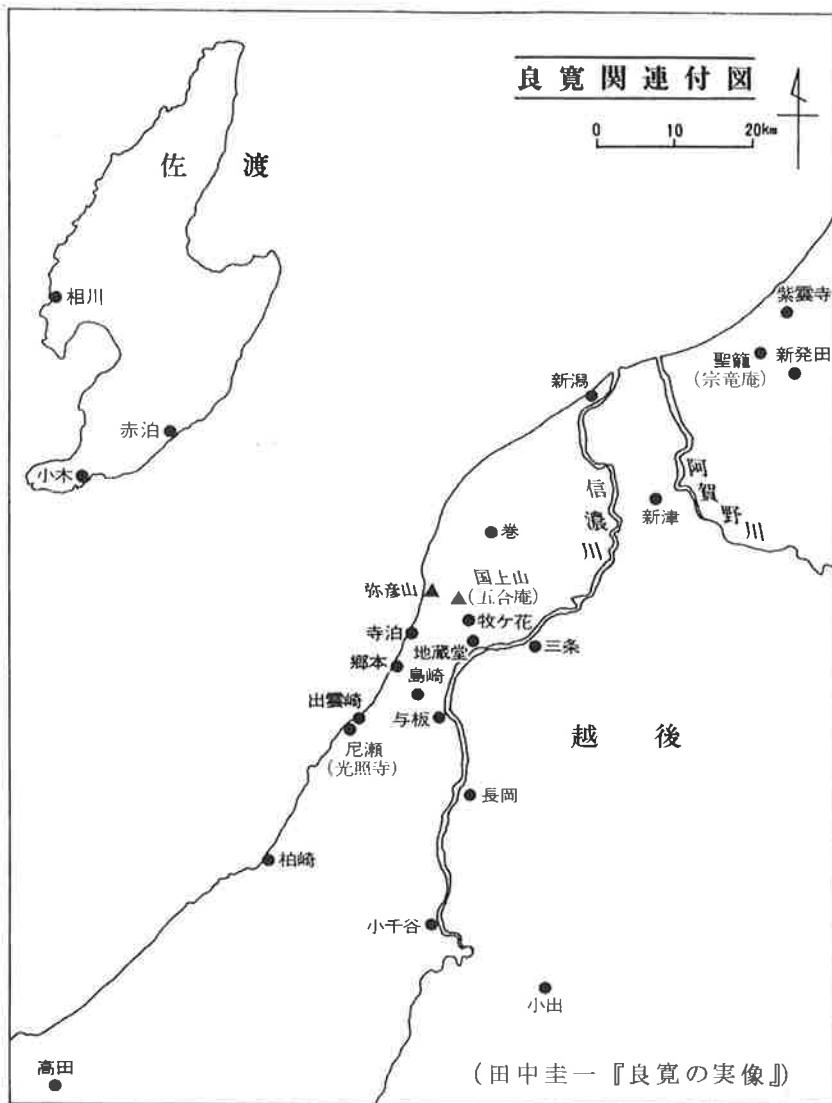


良寛伝記の世相

(平成十四年五月十九日)

於

新宿文化センター



この五月二十三日、佐渡（相川）で「全国良寛会」の総会が開かれるのをご存知でしょ
うか。今日はそれにちなんで良寛について少しお話してみたいと思います。

良寛のお母さんというのは相川の人で、家は相川郷土博物館に登る手前、海岸通りを行
きまして濁川という川の丁度手前（当時は大間町）にありました。姓は山本、慶長のころ
出雲崎からここへ店を出した米商人であります。この近くに出店の蔵が建つていて越後か
ら米を運んで来て、奉行所に近い米屋町で米商人を相手に米の卸を営んでおりました。

当時の相川は人口四万人余、年間に消費される米はおよそ六万石という大変な量で、年
貢米のほか、百姓が売る米と他国から入ってくる米によつて賄われました。そして、六万
石を調達するには、六十万石を生産する土地がなければ、これだけの量の米は出ないと云
われておりました。参考までに申し上げますと、私どもが加賀百万石という場合、それは
生産額を指すもので、年貢米は三〇万石ほど、市場に出るのは生産額の一〇分の一、一〇
万石程度であります。秋田から加賀越前あたりまでの米が買い漁られ、相川に運び込まれ
てきました。良寛のお母さんの家は佐渡奉行の渡海場の出雲崎橋屋の出店で、大変有力な
商人であつたようであります。しかし、金銀山が衰えとともに米が売れなくなり、また渡

海場が出雲崎から寺泊に移ると本家の出雲崎橋屋も次第に衰運に向い、十八世紀の終り時分には、家を継いだ兄弟が奉行所に加茂湖（両津）を埋立てて田圃にしたい、というような計画書を出すほどになつてあります。両津の人たちに、「そうなつたら漁業で食つている自分達は困る」と申立てられ中止になつております。鉱山の衰えとともに、佐渡は米を買う国から売る国へと変わつていくわけです。一七〇〇年ころから毎年一万五〇〇〇石くらい他国へ売りかかつており、ときどきは大坂へも運んでおりますが、大体は小木（小木町）で払い米（市場流通米）として他国の商人に売つております。国の石高を加賀百万石とう言い方からすれば、佐渡は十三万石程度、この三割の四万石は年貢（税金）、そのうち他国へ売つたのが一万五千石程度、生産高からいえばその程度の国柄とご承知頂ければ宜しいかと思います。

しかし、幕府が持つっていた直轄領——私どもは「天領」といつておりますが——そのなかでは佐渡が一番大きな国であります。それ故、幕府の法令というのは佐渡に向けて出されたものが非常に多い。具体的な内容を持つ法令、年貢や争いについての法令で、全国の大名に向けて出されたものではありません。鎖国令のような原則的な法令だけは他の藩も規定しますが、幕府が他の大名に出すわけがありません。ですから、佐渡の人には幕府の

法令は理解しやすいのです。同じ直轄領でも佐渡以外の地域とは無関係というような法令も一杯あります。今までいう法律とは違つて、その藩にはその藩の法律があるということです。しかも出される法令は禁止令がいかにも多いのです。したがつて、それを守る者もいれば守らない者もいる。バスの定員のようなものです。無理をしてでも背中をおして乗せてくれたりします。定員オーバーは法律違反ですが、会社に遅れたりするから誰もそれを咎めたりはしません。そういう風に、法律というものは適用を受ける側の都合によつて守つたり守られなかつたりするのはいまも昔も同じであります。法律を守れ、と逆にいうときは政府の都合で言うんだと考えればいいわけです。

さて、良寛のお母さんのことですが、相川から出雲崎の橋屋に養女に行つて結婚しますが、五年ほどで夫と別れ、与板よいたからきた青年と再婚します。そういう状況の中でいよいよ良寛が登場してまいります。良寛が登場して来る一七五〇年のころというのは、次第に世の中が変わつてきて、それまでの政治のやり方では物事がうまく進まないことが多くなつてまいりました。例えば、一七五〇年（寛延三）に佐渡では最初の本格的な百姓一揆が起きます。山田村（佐和田町）に太郎右衛門という有力な名主がいますが、その有力者が一

揆を起こします。私どもは一揆といいますと、百姓が鎌とか鍬をもつて暴れたと思いがちですが、そういうことはありません。起きた原因というのは、幕府が百姓との間に結んだ約束をチヤラにしたからなんです。これは、私どもがずっと保険や年金に加入してきているのに、ある日会社や政府から一方的に止めた、と宣告されるのと同じです。世の中がうまくいかなくなつて、ある時そういう事態が生じるというような事はいつの時代にもあります。この一揆の場合、一七一六年に徳川吉宗が八代将軍に就き、幕府が政治のやり方を変えようとしたことが伏線になつております。つまり政治を刷新しようとするんですが、まあ、口だけで余り大したことにはならんのです。本人に実力がないから口だけなのかと、いうと必ずしもそうではなくて、時世というものがあるからです。

この吉宗が将軍に就く前の荻原重秀という勘定奉行（佐渡奉行兼）の時代は、日本中がバブルでした。荻原は佐渡の鉱山に二〇万両という大金を投じ、佐渡に繁栄をもたらした人物です。失脚してから悪く言われるのですが、佐渡では「荻原近江守様の時代」と言われるくらい慕われ、繁栄の頂点に登場するんです。余談ですが、昨年、佐渡相川金山祭に荻原奉行の末裔が招かれ、私は大変仲良くなりました。末裔は神奈川県の辺りに住んでいるのですが、自分は荻原重秀という悪い先祖の倅だと思つてきたが実は大変な経済

学者なんだ、ということを私の書物を読んで（私は忘れておりましたが）、知つておりました。そうして、「自分の父は荻原重秀の子孫だというので頭を抱えたまま死んでいった。それが自分はあんた（田中）の本を読んで自信を強めることができた、仲良くしよう」というようなことになつて、私はちょっと悪い酒でも飲んだような重い気分になりました。それはともかく、世の中がバブルということは、万事お金がものをいう世の中になつたということです。荻原奉行はいつも江戸に居りますので、家来が毎年米の出来具合を見に佐渡へ来ます。そうすると、金持ちの百姓はつい自分で家来にご馳走してしまいます。接待してテラ銭を出した所には年貢を負けたり、手心を加えるということが出てきます。家来がやつたとはいえ、荻原の監督不行届きという事態になり、新井白石によつて荻原の首が飛ぶんです。接待した者が悪いとか悪くないとか、はたまた牢に入つたとか入らなかつたとかの話はこの際不要で、新聞種でしかないので止めます。

やがて、吉宗が登場し、新しい税金の取り方を考えざるを得なくなり、相川に名主（佐渡は二六三ヶ村ある）を呼んで提案します。「これから毎年田圃の出来具合を見て年貢をとする検見制は止める。その代わり、今までの一〇年間の平均（定免制）^{じょうめんせい}で行こうじゃないか」と。若干の経緯はありますが、それがいいと百姓も賛成することになつて定免制が決まり

ます。こうして金持ちから饗応を受けるという悪いしきたりもなくなります。百姓はこれまでのやり方は芳しくないから、ずうつと今度の方法でやつてくれと云い、五年ごとに更新し、以降何十年も続くことになります。

幕府としてもそれはそれで宜しかったのですが、困ることがありました。それはバブルの時代、財政規模が毎年増え続けて、今の日本に似た状態になつてきました。皆さんお分かりのとおり、どうしても必要な支出というものがあり、増えてきます。ところが、年貢収入が一定しているので、それに見合う収入を捻出できない。年貢を上げたいと思つても、今度は百姓がなかなか言うことを聞いてくれない。佐渡の場合、五年毎に契約更新する時に少しづつ年貢を増やしてもらうということをやる。佐渡の百姓は、国のために頼みをひとつ聞いてやるか、とシャンシャンと手を打つております。年貢を上げて実際に百姓が困つたかというと、文書には「困つた、困つた、これじや食うてゆけん」と書きますが、皆食つておるんです。これはいつの時代でも同じです。小木港から売られていく民間米は毎年増えています。全国みんなそうでありまして、お上に出す文書には、「私どもはこの高い年貢では食うていけません」と書きりますけれども、食わずに死んだという前例はありません。みんな生活が向上している。例えば、吉宗の頃の幕府の文書にはこんな事が書いてあります

す。「江戸城に登城する大名に時たま裸足で来るのがいる。裸足というのは良くない、みんな白足袋を履け、登城する時は袴を着ろ、役人は役人らしくしつかりせにやいかん」というようなことを言う。するとみんなそれに従わざるを得ない。何故幕府がそういう事を言いだすかというと、庶民はみんな裸足じやなくて草履を履いたり足袋を履いたりしているでしょ、役人が江戸城へ裸足で登城すると庶民に笑われる、というわけです。その頃の佐渡なんかで見られるのは、「役人のかみさんが庶民と一緒に店に行つて買うのはなるべく止めるように、武士は武士の家らしく届けさせるように」(届けさせると値段が高くなる)、武士は武士としての風格を保てなくなるというので、そんなことを言つたんです。収入が一定なのに支出がちびちび増えますから、幕府の台所から武士個人の台所に至るまでだんだん厳しくなつて来ます。

佐渡奉行所には二〇〇人近い役人がおりますが、大部分は、年間に米二〇俵三人扶持といふ給料に決まっております。これは幕府の給料体系では一番低い。しかも佐渡奉行所の役人は転勤がきかず、松ヶ崎とか小木の番所に行かなければ、ずっと相川暮しであります。米一俵は五斗ですから一年に米十石、これが主たる収入で、そのほかに三人扶持、つまり、家来三人を置けますので家来一人につき一日五合、三人で一升五合が与えられます。

全部合わせて年間の収入は米十五石になりますが、当時の百姓の一反歩二石取りからすると暮し向きは楽ではないと思います。この三人扶持についても、幕府はうるさく言います。「家来を雇うお金（米）をやつたのに雇わないで自分でやつてるのは怪しからん」。似たような場面を昨今テレビで見ることがある。本当に雇っているか検査するというようなことになる。どうでもよいようなものですが、そこが法律の厳しいところです。そうして、外出する時もちゃんと家来を供に付けて出るかどうかを確かめるため見張りを増やしたり、役人に規則をきちっと守れというような事を言います。こんなことを言つたつて世の中が良くなるわけがなく、だんだん幕府はやつていけなくなる。そこで、一七五〇年頃、佐渡で定免制を止めて、稻の出来具合を見て税金を取る検見制けみせいにします。百姓が、「それは約束が違う、幕府は年貢を固定すると言つたじやないか」と言って、江戸へ訴えるわけです。幕府としては検見制に戻せばそれでいいのですが、百姓にとつては死活問題です。結局のところ、法律を遵守しないとして太郎右衛門ら首謀者三人の首を刎ねるという厳罰に処しました。

世の中がそれまでのやり方では立ち行かなくなり、考え方を切替えなければやつていけない時代というものがあります。今日で言えば、先程申しました医療保険とか年金制度が

それで、今の調子で十年もしたら、ドイツのようになに全廢せざるを得ない。一部減らそうなどという位では追いつかない、若い人が加入しませんもの。それでやつていけなくなる世の中つていうのはいつの時代にもあり、一つの転換期がこの時代に訪れております。

良寛が生まれ育つのは、こういう転換期の時代であるということを頭に入れておいて下さい。人は時代の子といわれますが、やっぱりその時代の世相というものをちゃんと身に着けて育つていることは間違ひありません。私どもは、皆日本人は同じだと思いがちですが、親と子を比べてみましても意見が合いませんものネ。今晚夕飯でも食べながら話し合いましようなどとやつても、結局駄目なことは皆さん先刻ご承知のとおり。そういう転換期では親と子の意見が合い難くなりがちで、良寛も例外ではありません。

さて、良寛の生涯で一番大きな出来事は、「師（先生）」と、父を捨てて他国に奔る「家出」です。私どもは、「良寛様は家を出てから尼瀬町の光耀寺に入つて、そこのお坊さんに頭を剃つてもらつた」という具合に聞いておりますが、これは明治にこしらえた作品であります。江戸時代の史料に、出雲崎で良寛がお寺に入つて頭を剃つてもらつた、と示すものは一点もありません。伝記作家の作った歴史です。歴史とは事ほど左様に時代が作るも

のです。いつかお話したことがあります、井伊直弼は天皇の許しを受けずに条約を結んだ悪い奴、國賊だと、私は小学校の頃習いました。けれども上の学校に行きましたら、開国の恩人になる。私どもの頭は応用が利いて、どっちでも都合のよいように使います。これは時代の変わり目に生れた人間が持ついい加減さです。

良寛は、「少年父を捨てて他国に奔る」、そのあとに「虎になろうとして猫も成らず」と続く詩を書いている。良寛がこういう面白い詩句を残したということは生まれ育った時代と無関係ではない。良寛が家を出て他国へ奔ったというのは、例えば、親父に勉強せんでも怒られ、外に放り出されたとか家を追い出されたとか、というようなこととはちょっと違うんです。良寛の場合、そこに時代の色合いが付いて面白いところであります。

ところで、私は良寛の研究者でもなんでもないんです。冒頭に申しましたが、この三日に相川で全国良寛会が開かれるというので、本に載せる少しばかりの原稿を出しました。どうも私は、全国の良寛会から親の敵のような奴で許せないと日頃言われております。

私どもが良寛さんについて持っている常識というのは、先程申しましたように、「少年の時、お坊さんになりたいと光照寺に入り、その玄乗破了和尚に頭を剃つてもらい、岡山

に行つて修行してお坊さんになつた」という修身講話になつております。そうして私がこれからお話するのは、そういう明治の修身教科書がどうして出来たかに行きつくわけです。私はよく人に言わるんです。「定説が出来ているものをどうして崩す必要があるのか、悪趣味だ、田中という馬鹿は……」。馬鹿は何人もおり馬鹿仲間で氣炎を上げております。大体、良寛研究家は文学をやつている人が圧倒的に多く、そのほか書家、詩人、小説家、教育者などが全国におられます。

私は良寛のことで深入りする気はなかつたのですが、二十年ほど前ふとしたことで、良寛のお寺、即ち橘屋の菩提寺の円明院を訪ねました。そんなことをしなければよかつたのですが、ちょっと頼まれごとをして、そのお寺を訪ねました。

こここの住職は吉田さんといつて健在です。先程の私どもが知つてゐる話というのと一体どこから出て来たのかな、と思い訪ねて、調べてみると、明治二十年にこの家の主の「橘伊織」という人物が「山本家譜」（以下、家譜）という、家の歴代譜のようなものを作つております。これが問題の発端であります。皆さんもこの「伊織」という名前からして神官らしい、と感じられると思います。この人が何故家譜を作つたかは、時代の要請です。良寛のことについてお聞きしたいという者が沢山訪ねて来るもんですから、こういうものを

作つたらしいんです。彼は、円明院の過去帳を基にして作りました、という風に書いております。この家譜の中に初めて良寛のお母さんの名前「秀比米」が登場してきます。「配秀子神謚」を秀比米命みこと、仏謚を樹林院法音蓮秀大姉ひでひめ。「配」は妻の意、「〇〇比米」とか「〇〇の命」というのは神道では「神おくり名」(神謚)といい、仏教の戒名に当るものです。私が円明院を訪ねたのは、お寺ではどういう戒名になつてているのかなと思つたからです。

過去帳を見ると「樹林院法音蓮秀大姉」という戒名を持つていました。そうなると、この母親はどつちでお葬式をやつたんだろうか、と皆さんも考えますでしよう？ 神道と仏教と両方でお葬式をやるなんてことはありえませんよネ。更に調べると、橋屋は、実は明治七年に仏教を止めて神道になつており、それが大正二年まで続き、大正三年からまた元の円明院（仏教）に戻つている。そうすると明治七年までは「秀比米」という神道の名前はないはずです。伊織は過去帳を見て「秀」の字をとつたわけです。それで、良寛のお母さんは「秀」という名前になるのですが、それより前、江戸時代にもお母さんがどういう名前を使つていたかを示すものは一つもありませんでした。

申し上げておきますが、明治、大正、昭和に亘つて現れた「秀子」というサインの入った色紙・短冊類が沢山ございます。今でも横浜と出雲崎にこれ専門に書いている人たち（贋

作者）がおります。これはまたいつの時代も同じです。良寛の名の付くものなら何でもいいというわけではあります。ついこの間まで出雲崎の「良寛記念館」には、誰が歌や短冊を作ったのか知りませんが、秀子の作とされる、「わくらばに待ち得てあひしかひもなくまたつげゆくかこしじへの空」というのが展示されておりました。谷川敏朗氏（元新潟高校国語教師）によると、「歌は新古今調で、筆跡も流麗で癖がない。このひで子の血筋が、良寛には発句よりも圧倒的に和歌の作が多い。（中略）またその書には、以南のごとき個性的なあくどさがない。ひで子の持つなめらかさを、良寛も身につけていたのである。このひで子の素質は、良寛だけでなく他の子供たちにもみられる。」（「良寛点描　その生涯の謎をさぐる」別冊『墨』第1号）と評しております。まあ本人は信じているのでしょうか、橘秀子という人物は実際は存在しないわけでありますから、後年誰かが作ったに違いないと私は思うんです。また、新潟大学の先生が「良寛」という本を出版され、その中に、「田中はこういうことを言っているけれども、嫁いでから違う名前に変えたことが絶対ないとは言いかれない。田中たちが言っていることは真つ赤な嘘だ」と言つておられます。橘秀子の色紙を買う時はちょっとそれは違うかもしけんぞ、と考えておく必要があるかもしれません。

この家譜を土台にして良寛や秀子のことを最初に書いたのは、西郡久吾という人物です。前は佐渡の金澤小学校の修身の先生、後に長岡中学の国文学の先生になります。この先生は大正の初めに『北越偉人沙門良寛全伝』というややこしい名前の本を書かれましたが、これは大変有名な書物で、良寛に関する定本といわれたものです。今日私どもが知る良寛伝記の最初の書物です。皆さんは、西郡先生が講談社の絵本に書いた筈の話をご存知でしょう。「床下から筈が伸びてきたので、良寛はそれを伸ばしてやりたいと畳をはぐつてやつた。天井までもどんどん伸びてきたので屋根を破り伸ばしてやつた……」というのですが、元の話は違います。良寛が便所に竹が生えてきたので蠟燭を点けて屋根に穴をあけようとして火事になり便所を燃やしてしまった、たつたこれだけの記事なんです。それを講談社の絵本では、良寛は生きものを可愛がった、みたいな話に拵えてしまうわけです。修身の教科書の中身はもう忘れましたけど、良寛という人は、生き物を可愛がった、感心せい、という風に書いてありました。もつとも、修身教科書の編修官は相川出身の萩野由之博士でした。余談ですが、佐渡中学校は明治二十九年開校し三十一年に新築校舎になりますが、その時西郡先生は佐渡に初めて中学校ができた喜びの文章を書いて出しております。何年佐渡にいたか知りませんけど、我々の爺さんたちが習つたに違いないと思います。まあ、

それはともかく、こうしてみると、佐渡も良寛と無関係ではないわけで、一所懸命そういうことをやつております。

このように家譜を土台にして定説が出来てくるわけがありますが、その要点をかいづまんでお話しします。

「良寛は子供の時は〈栄蔵〉という名であった。安永四年（一七七五）に光照寺といいうお寺に入つて、そこの玄乗破了といいうお坊さんに頭を剃つてもらい、坊さんになつた」と。しかし今日では、この玄乗破了はお師匠さんではなく兄弟弟子だといいうことがわかつて、あらゆる書物が採用しております。なにかの間違いといいうか、出だしから間違つております。良寛という名前は、良寛が玉島円通寺（岡山）へ修行に行つて、そこの国仙和尚からつけてもらつたもので、話のついででそうなつたんでしょう。定説は事の成り行きから見て、橘伊織が明治に作つた物語で、あつちこつちに間違いがあります。例えば、「良寛には兄さんがおつたが早いうちに死んで、戒名は〈智光童子〉である」。円明院で調べると「智光童女」とあるので兄さんはいないわけです。作家の水上勉は、「それは住職の書き間違いかかもしれない」という風に書いておりますが、そんなことを言つたら、良寛だつて居たか

も知れんし居なかつたかも知れん、ということになつてしまふ。そういう類の話はいくらでも言えるんです。良寛のお父さんははずうつと後に京都で自殺するんですが、実は自殺と見せかけて他国へ行つた証拠がある、という小説まで現われる。こんなことは歴史の外の話でいちいち付合いきれません。義経が大陸へ渡つてジンギスカンになつたなどというのと同じ。或はそうかも知れんけど、それは好きな人にまかせます。今のところ、一応お寺の過去帳に従つて、兄さんは存在しなかつたということにしておこうと思います。以上のことを円明院で確かめ得たわけあります。

昭和五十六年四月、相川の磯部欣三さんが毎日新聞に、「良寛のお母さんは「のぶ」という名前である」と発表されました。それには「相川の橋屋の「のぶ」というのが出雲崎へ養女に行くことになつて、何月何日に相川を出発した」という奉行所の許可書が載つている。それで、お母さんは「ひで」ではなく「のぶ」ということになるんです。これは良寛研究者をアツと言わせます。アツと言うより、これまでの研究がさっぱり嘘になつてしまふのですから、大変困つたことになつてきたわけです。「のぶ」が後に「ひで」に名前を変えたということを実証できれば別ですけど、今のところ止めておこうと思います。号を名乗るのは未だしも、「のぶ」が嫁にいつたら「ひで」に名前を変えるというのはちょっと激

しすぎますからね。

そこで、どうしてこういうことになつてしまつたかということです。

先程、秀比米という神謐と樹林云々の戒名の両方を持つてゐる、という風に申し上げましたが、それは実は明治のころから分かっていることで、両方で葬式をやつたら不思議だなど、どうして明治の人は思わなかつたんだろうか。円明院の住職吉田さんに、「今まで過去帳を見せてくれと言うたのは磯部さんとあんただけや」といわれたんです。それほど良寛のちゃんとした定説が出来上がつていて、動かすことのできない重みを持っていた事は間違いないところです。それが、昭和五十六年に「のぶ」という名が明らかになつて足元をすぐわれたわけであります。どうしてこういうことになつたのか問題なのですが、こういう体たらくですから、良寛に関しては、本人が書いたといわれるものでも圧倒的にニセモノが多い。みんな良寛を愛してると言うだけで、本人が書いたものでもそうじやないものでも、良寛のものだと言うと皆信じてしまうという次第。良寛の弟は何人か居るんですが、兄弟みんなで描いたという屏風まで売られております。売つてもかまわないのですけど、さる高名な方が大仰に見せているんです。もう実に氣力堂々と描いてあつて、まあ、良寛から母親に至るまで凄いものです……。或る人が私に見せました。「実は先生、これ千

二百万円で手に入れました。安いでしようか高いでしようか」。私は「それは凄いもんでしょうございます」と。わたしの商売用語でウソで言う場合、「あー、それは結構なもので、ありがとうございます」と言います。昔、「結構なものです」という時はウソだと言つていて、そういう風に先生に習いました。私はそれを早速思い出しました。そしてもう一度、千二百円は安いでしようかと訊かれたので「私は何ともそういう方面は存知あげないもので……」。平成の世の中になつても相変わらずまがい物が流通しているのですから、世の中には必要があれば何でも生れるということで、良寛の書いたものだというのはゴマンとあります。かつて相川で良寛の展覧会が開かれた時（いつだつたか知りません）、それを観た良寛研究者の宮栄二先生が、本物は一点も無かったよ、というようなことを呟かれました。それほど良寛本人が書いたものは少なく、反面、良寛書きが居るということです。良寛の字を上手いと言う人がおりますけどネ、ウソらしいです。我々が学校の習字で習う筆の持ち方と違つて筆の上のほうを持つて固定せずに体ごと動かして書くと、良寛のような字が書けるそうです。「良寛の字は凄いもんですナ」と言われても、まあ、私などは元々基準がないので何が凄いのか分らない、他の人もそう言うものですから恐る恐る押させて頂いているわけであります。大学の書家の先生でも必ずしも見る眼があるとは言えないようです。個人的

に愛蔵するものはともかく、博物館のような公のところにあるものは贋物だと言つてかまわない。そういう風に贋物がたくさん現れるというのは、良寛の研究者には歌人とか文学とか、そちら方面の方が圧倒的に多く、本物か贋物かというような眼で考えようとしないからでしょう。

あれこれ調査している内に、良寛の母親おのぶの最初の亭主と思われる新津の桂さんと
いう人の系図の下書きを発見し、私は大喜びしました。それには、良寛のお母さんの最初
の亭主は、これまで言われていた橋何某ではなく、別の人だと書いてあるんですよ。これ
は大成果だと思っていましたら、或る人がそれを一日だけ貸して呉れんかと自分の家に持
ち帰つて、なんと家ごと燃やしてしまつたんですよ。それほど熱心というか、こういう史
料が現れるのは許せないとする熱狂的な良寛信者が世の中に居るもんなんですね。幸いな
ことに、偶々私の周りにいた人がコピーを取つてくれていたので無事相済みました。この
行動は竹槍もんだと思って、それからコピーは門外不出にして、どなたにも見せておりま
せん。本当に竹槍が出ると困りますからね。

次に、良寛と父親との喧嘩についてお話をすることにします。

そこで先ず家譜がどういう事情、どういう必要があつて生れてきたかをお話したいと思
います。

家譜が明治二十年に生れたという事は、そのころに「良寛の伝記を作りたい」というよ
うな世相が生れたということです。それを作った西郡先生は、初めから終りまで良寛を美
徳の持主という風に描いて見せたわけであります。元々は「師国上の草庵にありしどき筈
廁の中に生ずるに師蠟燭を点じその屋根を焼き筈を出さんとす。ひいて廁を焼けり」。それ
だけの話です。のような講談社の絵本になるということは、そういう良寛像を世間が望
んでいたのです。西郡先生がどうしてそんな事を考えるに至つたか簡単に申し上げます。

明治三十年代自然主義文学運動というものが起きてまいりましたが、それに対し古い
修身の先生は、自然主義文学などというような「へちやめちやなもの」に日本人は騙され
てはいけない、日本人には確かな精神の伝統がある、と主張します。これに対して相馬御
風はその著書の最初に、西郡先生が書いていない「貞心尼ていしんに」を持つてきます。西郡先生の
本には、この尼さんが良寛にまとわりついたという話は出ません。まとわりつくとい
うのは言い過ぎかも知れませんが、実際にまとわりついております。以降、修身の教科書
には、こと良寛に関しては女性の話は登場しません。当時の硬派の人たちによれば、相馬

御風のような軟派文學者の本を「貞心尼のことばかり大きさにとりあげた」と見做すわけです。どつちの見方につくかは各人の勝手です。丁度明治の価値の転換期、そういう時代に系統の違った二つの伝記が出来上がっております。相馬御風の『大愚良寛』が大正七年くらいですから、自然主義運動と漢学の対立が二つの良寛の伝記を生むことになるわけです。非常に道徳的な伝記と、彼ら漢学者に言わせれば非道徳的な伝記と両方出でます。

西郡先生が伝記で一番気をつけたことは、良寛が家出をしたという事を意識して抜いたことです。江戸時代の越後三条の物書き橘崑嵐こうじんらんの『北越奇談』には「家出した」ということがちゃんと書いてあります。それに対しても家譜には、「安永四年十八歳にして遁世し尼瀬町光照寺に玄乗破了和尚の徒弟となり剃髪し、名を良寛と号する」、という具合にまとめてあります。

そこで、出奔のことを少しお話することにしましょう。

良寛をなぜ光照寺に入れたかということが一つ問題になります。西郡先生はこう述べております。「良寛は名主役の見習となりますが、この時、出雲崎の代官と漁民との間に争いがありました。名主は調停の地位に立たされたのですが、良寛は仲裁せんとして代官には漁民の言い分を申し上げ、一方漁民に向かつては飾りもなく代官の通達をしましたので、

両者の怨念がかきたてられ、代官は栄蔵を叱りつけた。そこで栄蔵は、ああ、恐るべき世の中だと言つて、直ちに光照寺に奔つた」と書いております。相馬御風も似たようなことを言つております、「名主見習いになつてから、ある時、佐渡奉行が船に乗つて行こうとした事があった。奉行の駕籠の柄が長すぎて乗せられないのを見た彼は、どうしても積むことができないのなら、いい加減のところで切つて担ぐ棒を短くしたらどうか、と言つた。

奉行が怒つて名主見習の彼を叱りつけた。それで彼は寺に入つて頭を剃つた」という話になつております。要するに御風のころは、良寛は名主の見習いをやつて失敗したのでお寺に転がりこんだ、ということになつております。これが昭和になると、良寛は子供の時からお坊さんになりたいと思つていた、という具合に変るんです。つまり、「良寛は普通の人間と違つて非凡な人物だつた」から始まつて、大正から昭和になると人間が凜々しくなつて理屈の付け方が高邁になつてきます。こういう理屈を付けられると、私どもは言い様がなくなつてきます。もつとも、疑問もありました。「自分の家の前のお寺に入つていたら、親父が連れ戻しに来やしないか」と。誰でもそういう心配は持ちます。それに対しては、出雲崎の良寛研究の第一人者といわれた佐藤耐雪翁たいせつが、「良寛様が光照寺に奔られるまでには将来師と仰ぐべき破了の寛大な度量を見込んで、この和尚ならいかに父の勢力の手がの

びても、それを拒否する力ありと認められた結果である」。どうも勝手な理屈ですが、そう言つております。書物によつては「良寛様はその数年間このお寺から一歩もでなかつた」とか、「そちら辺りを托鉢に出たけれども姿形を変えておつた」というものまであり、様々です。お寺に入った理由については、今申し上げたようにはかばかしいものがなく、世の中で失敗したのでお寺に逃げ込んだみたいな格好で書いてあります。これが明治の世相なんですね。

そして、良寛が進んで（素願して）寺に入つたと言われるようになるのは昭和であります。戦前の文部省教科書は、困つたから寺に入つたなどというのは許せない、間違いとしました。始めから固い意志で入られたと書き直すべきである、と考えたのです。ですから若い方はこつちの話を習つているし、我々の親父の頃は「失敗続きでどうもこうもならんで、お寺に転がり込んだ」という話があつたようです。人生の苦労を逃れるためにお寺に入つたという書き方は、入る動機としてはちょっと弱い。世相というものは面白いもので、後から考えてみると可笑しげなことでも、その時代の人は不思議だとも思わないんですよ。さて、今申し上げたような事について、戦後まず疑問を呈したのは、須佐晋長という人物です。昭和三十年、『国文学 解釈と鑑賞』に論文を寄せ、「これまでの定説には疑問が

しょうがん

ある。理由は、貞心尼や証願しょうがんの書いた略伝にも玄乗のことを云つていなし、光照寺に居た年代も全然わからない。それに良寛さまのお話にもそういうことを聞いたことがない。だから、その寺に入ったかどうかという事自体確かめようがないぢやないか」と。これで、今まで私どもが持っていた常識——良寛は昼行灯といわれたとか、世渡りが上手くなかったとか、代官と上手くいかなかつたとか、要するに世の中が疎ましくなつてお寺に逃げ込んだ——がぐらつと来るんです。それに対して須佐は、「父を捨てて他国に奔る、虎になろうとして猫も成らず、という位の詩を作った良寛が、世の中がいやになり世を捨てて寺に逃げ込んだなんてあろうはずがない、考え違いだ。一体国文学者としての見識があるのか」という風なことを言うわけです。衣鉢を継いだ東郷豊治（当時大阪外大）が昭和四十五年に『新修良寛』を著すと、評論家小林秀雄によつて、良寛伝記では最良の書物と激賞されます。ところが、良寛会の方では、「あの本は読んではならない、読んだ者は会に入れない、インチキ野郎だ」ということになつた。でもね、考えてみると今じや至極当たり前の内容なんですよ。

これから、「秀子」のことには話を移します。

西郡先生は、先程の『全伝』にたつた一回、良妻賢母の誉れ高い女性だった、と名文で書いている。要するに、内助の功云々は女性を良くいう時の常套句で、その手のことは一度言えばもうそれでよいと世間は受け止めることになるんです。まあ、良く言つて何が悪い、そんなことにいちいち文句を付けて何になる、という色調が強い。そして、いとも簡単に秀子を良妻賢母に仕立て上げ、子の良寛が偉人として語られることになる。私なども一度東京の良寛会に呼ばれ、「あんたは良寛のこと」をグダグダ言うけれども、偉くてなぜ悪い。我々は良寛を尊敬するために会を作っているんだ」と非難されました。それなら何で私を呼んだということになるんですが、定説を後生大事に信じている人達には感心できない書物を、私が書いたということになるわけであります。

このように大正の相馬御風、戦後の須佐晋長、東郷豊治という風に定説に対して少しづつ文句が出てきました。そこで、定説が怪しいといつても実際はどうなんだ、ということを次に考えていかねばならないわけです。

良寛がどういう人間であったか、定説の影響が大きいのでよく分からぬのですけれども、十二歳から十八歳くらい（出奔する前）までは「地蔵堂」（現西蒲原郡分水町）で、大森子陽しようという大変偉い先生の所に勉強に行つており、家にはあまり居なかつたらしいです。

中村さんという家には、その頃良寛が居たという部屋が残されていますから間違いないと思ひます。そこで、何故、「少年父を捨てて他国に奔る」ことになるのか。最近、資料により事情がかなりはつきりしてまいりました。

良寛は、この町で回船業を営んでいた敦賀屋吉右衛門という家の婿さんと一緒に子陽のところで勉強した。それから橘以南という良寛の父が、このお婿さんのことを巡つて、お盆の最中に息子の栄蔵（良寛）と激しく言い争い、その晩から栄蔵がいなくなつたということが分つてきました。言い争いの理由は簡単です。橘以南は名主ですが、敦賀屋の婿が代官所への節季の挨拶に刀を差していくつたのが許せん、と言つて怒つた。謝ればそれで済んだんでしょうが、婿さんが家に帰つて子細を話すと、お婆さんが、「私の家では昔から家の格式で代官所には刀を差して行くことになつていて」と言つたので、婿さんはまた代官所にそれを言いに行つた。こういう経緯がある。子陽という先生は直裁型の人で正しいことは正しいと主張する人物のようで、良寛もその影響を受けて頑張りやさんのところがあるんですね。親父と喧嘩して出て行つたと、これだけの話だったらどこの家にでもある話なんですが、良寛の場合、家を出てから音信なしの数年が続いたという当時の記録があるんです。これは、人間がどういう境遇に遇つたかということと深い係わりがある、と私は

考えます。

実は、良寛の母おのぶは、寛延元年（一七五〇）、新津から入婿の桂家の新次郎と夫婦になりますが、宝暦五年（一七五五）に与板の新木家の重内（橋以南）が入婿し再婚している、ということが分つてきた。この三、四年の間、おのぶにしてみれば嫁入り、養母の死、最初の亭主との別れ、再婚とめまぐるしい。何故こんなことを詮索がましく述べるかといいますと、これも皆さんご存知のようにこんな話があるからです。「良寛が子供の頃父（以南）の顔をしげしげと見たら、父から、そんなに睨むと鰐になるぞと怒られた。それで海辺の岩の上にちょこんと座つていたらお母さんが迎えに来た、そうしていつになつたら俺は鰐になるのかと悪たれ口をきいた」という話です。これには二通り解釈があつて、詩人の某先生などは、本当に鰐になると信じていた純粋な人間だったと書いているし、私はそういう考えないで、岩の上で白眼をむいていただらうと書いたら、そのとおりだという人が多かった。それまでは良寛は名主の息子ですから別段苦労することはなかつたわけであります。又、良寛は母親のことについてはいろいろな苦労をしたらしいです。再婚したおのぶと以南の間がどのようなものであつたか想像はできますが、具体的に語るものはなにも残されておりません。そして父が良寛のこと記したものもありません。良寛が無上に母を

愛したことは多くの母を恋う歌を残していることから明らかです。父に関する歌や書いたものは殆ど絶無なんです。早まつたことをしたと振り返る日がある、という歌があるので、まともに父を歌つたものは一つもない。どちらがいびつなのか判りませんが非常に片寄っている。私はこの間には何か疑問があるなど六十年代になつて考え、それで、おのぶの最初の亭主の桂家を当たつてみたわけです。

ところが、新津の桂家というのは事情が複雑でしてね、その当時、当主は新津市長、家には本妻、新潟にはお妾さんがいたんですが、そこへ資料を見せてくれと頼んだら、いざそれ探しておきましようという冷たい返事。その後、桂家は破産し、資料は東北大学にキープされたのち、新津の斎藤さんという方が買い求め、自分の家の「万巻樓」（桂家の図書館）に収めたので、或る時調べさせてもらいました。そこで分かったことは、桂家三代「譽春」の長男が出奔して六部（諸国遊行の行者）になつたため跡継ぎがいなくなり、他家の入婿になつていた妾腹の男が引戻されて繼いだ、という記事です。その男が、先程家ごと燃やされたという史料（系図の下書き）に出てくる「のぶ」の夫です。新津の桂家から橋屋に来たということは橋屋の史料にも書いてあるので、新津から來たのであれば大庄屋の桂さんという家に違いないと富栄二先生に云われ、調べてみました。するとその中に、他家に

入婿に出ていた六又を呼び戻し、桂家四代「譽章」という人物になるということが分かりました。私は鬼の首でも取つたよう嬉しかつたですね。



真言宗国上寺（こくじょうじ）の 五合庵
(西蒲原郡分水町、大正三年再建)

良寛七十歳のとき、貞心尼（この時二十九歳位）は直接聞いたという話を「淨業余事」の記録に残している。「師が放浪行脚している時、宗竜」という偉いお坊さんがいると聞いて訪ねて行つた。お寺に行つてみると、そのお坊さんは隠居して別所にいた。生垣があり、門が閉まつていたので松の枝に掴まって入つた。廁の手水鉢の所に「会いたい」と書き物を置いて待つていたら、朝方使僧が廁へ来て声を掛けてくれた。そうして「これからは來たい時はいつでも来い」という風に言われ、とても栄蔵は喜んだ。しかし、師からその場所と寺号を聞きもら

したことは口惜しい。良寛が貞心尼にしたこの話は、とてもいい話だと私は思います。

宗竜というお坊さんを調べましたら、新発田市の北の紫雲寺という村におりまして、良寛と出会った時の建物（聖籠の宗竜庵）が今でも残つております。そしてこの宗竜を経済

的に援助していたのが新津の桂家なんです。詳しいことは時間がなくてお話出来ませんが、私などは、良寛をこのお坊さんに引き合せたのは桂家だろうな、と直感しました。

新津には良寛が青年時代住んでいたと伝える家が残っています。それは三代誉春のお妾さんの家です。そしてそのお堂に良寛が居たという話が残っております。私などは、良寛が宗童に出会った時は家出してうろうろしていた数年間のことだろうな、そうして良寛が足を向けたのは新津から近いここだろうと、想像したわけです。思うだけなら勝手ですからね。私などは、栄蔵という男は、一体、橋以南の子なのか、或いは先夫（新次郎、四代誉章）の子なのかということに関心を持ちます。それから、良寛の弟「由之」なども代官所から追い出されて以来、新津の桂家に随分厄介になっています。出雲崎から紫雲寺、新津は今じやあ車でどうということもない距離だし、昔でも左程遠いとは思えないのに、当時良寛を巡り桂家とこういう関係があつたということに何かあるのではないか、と書いたら、皆にそんなことはあり得ないと言わされたので止めました。今から申し上げては尻切れトンボになりますけども、良寛伝記はきちんと整理してみる必要があろうかと思います。

良寛が父、以南と言ひ争つて家を出て、それから四年間行方不明になる。長期に家を出るという場合は、玉島円通寺の「国仙」^{こくせん}という和尚に付いて蟄居したというのが定説にな

つて い ま す が、一 体 誰 が 国 仙 に 引 き 合 わ せ た の か 分 ら な い。と こ ろ が、宗 竜 は 国 仙 と 同 じ 寺 の 釜 の 飯 を 食 つ て い た ん で す。だ か ら、国 仙 が 越 後 に や つ て 来 る ん で す け れ ど も、そ の 時 誰 が 栄 藏 を 国 仙 の と こ ろ へ 挨 摶 に 連 れ て 行 つ た か が 問 題 に な り ま す。定 説 で は、早 い 話 が、「栄 藏 が 国 仙 に 弟 子 に し て 下 さ い と 賴 ん だ ら、オ オ 宜 し い と 言 つ た」と い う こと に な つ て お り ま す。し か し で す ね、国 仙 は 円 通 寺 の 僧 正 で す よ。私 ど も が 高 野 山 の 管 長 を 汽 車 の な か で 見 か け て 同 じ よ う に 賴 ん で、「ハ イ い い で す よ」と い う よ う な こ と に な る か ど う か。今 な ら と も か く、当 時 は お い そ れ と は い か ず、然 る べ き と こ ろ を 通 さ ない と 弟 子 を 引 受 け る と い う よ う な こ と は あ り え ま せ ん で し た。し か も 国 仙 は 死 く な る ま で、良 寛 を 非 常 に 愛 し 面 倒 を み て く れ た。良 審 が、「自 分 の 先 生 は 国 仙 と 宗 竜 で あ る」と ま で 書 く く ら い、この 二 人 の 師 と 切 つ て も 切 れ な い 縁 が あ る。こ の 宗 竜 に つ い て も 良 審 が 出 会 う の は、定 説 で は、良 審 が 越 後 に 歩 つ て か ら と い う こ と に な つ て お り ま す け れ ど も、私 は そ う い う こ と は な い と 思 つ て お り ま す。良 審 は 岡 山 の 国 仙 の お 寺 で 修 行 し て 歩 つ た わ け で す し、宗 竜 と は 同 郷 な ん で す か ら、し か も 四 十 歳 く ら い に な っ て い る。そ れ な の に 何 の 必 要 が あ つ て 手 紙 を 書 き 手 水 鉢 に 置 い て 待 つ た の か 疑 問 で あ る し、二十 や そ こ ら の 兄 ち ゃ ん な ら 松 の 枝 に 取 つ 握 ま つ て 入 れ ま す が、四 十 に も な つ て そ な こ と は ど う か な、と 私 なん か は 怪 し む ん で す。

昔の人は運動能力があつたと言わればそれまでですけどね。

今申し上げたように、大正から昭和にかけて出来た定説が非常に固かつたものですから、私どもはそこから自由にものを考へることが出来ないで今日を迎えることになつてしまつたように思います。先年の東大の調査によると、日本の歴史上で一番偉いと思う人物に、昔は親鸞だったのに、今じや良寛があげられているそうです。まさか筈の話で、とは思いませんが、まあ、越後の生んだ名僧でもありますし、いろんなところで偉かつたという話はさておいて、今日の社会状況と併せ考えさせられるものがあります。そして、初めは虎になつて世間を見返そうと岡山へ行つたのに猫にも成らなかつたというこの良寛について、私は余り偉くないと思つております。岡山から越後へ帰つてからも、それほど頑張つておりません。そういう点では、良寛という人は、当時としては、生き方が一番新しい型の人間であったように思われます。

良寛に関する書物は今日既に四五〇〇冊を越えているそうです。そして毎年良寛の本は出版されておりますから、機会をみてどちらでも好きなのを読んでみて下さい。

(了)

●私説 良寛年表

- 寛延三年（一七五〇） 母おのぶ、相川から養女。おのぶ、新津からきた養子新次郎（のちの桂誉章）と結婚
- 宝暦四年（一七五四） 新次郎、新津に引き戻される。十二月、良寛誕生
- 宝暦五年（一七五五） 母おのぶ、与板からきた養子新之助（のちの橘以南）と再婚
- 宝暦八年（一七五八） 通説では、この年に良寛誕生
- 明和六年（一七六九） 大森子陽、地蔵堂に開塾。良寛、この頃より五年間子陽に学ぶ
- 安永四年（一七七五） 七月十一日、敦賀屋祝儀事件起きる、七月十七日夜、良寛出奔
- 安永七年（一七七八） 良寛、宗竜に師事か
- 安永八年（一七七九） 国仙により良寛出家。国仙、良寛を備中玉島円通寺に伴う
- 天明三年（一七八三） 母おのぶ没（四十九歳）
- 寛政元年（一七八九） 師宗竜没（七十三歳）
- 寛政二年（一七九〇） 良寛、師国仙より印可の偈を受けられる
- 寛政三年（一七九一） 三月、師（六十九歳）。おそらくこの年、良寛円通寺を去る
- 寛政七年（一七九五） 橘以南、京都で入水自殺（六十歳）
- 寛政九年（一七九七） この年、良寛越後に帰るか
- 寛政十年（一七八八） 貞心尼誕生
- 文化七年（一八一〇） 亀田鵬斎、国上の五合庵に良寛を訪問
- 文化八年（一八一一） 橘崑崙、『北越奇談』を著す
- 文政九年（一八二六） 秋、島崎村の能登屋木村家に居を移す。
- 天保二年（一八三一） この頃、貞心、木村家へ良寛を訪ねる
- 天保六年（一八三五） 正月六日 良寛没
貞心、「はちすの露」を記す

（田中圭一著『良寛の実像』から抜書き）